

《書評》

重田園江『ホモ・エコノミクス―「利己的人間」の思想史』

(筑摩書房, 2022年)

小島 秀 信

本書は、近代経済学が前提とする人間観「ホモ・エコノミクス」がどのようにして成立してきたのかということについて思想史的に論じたものである。

本書におけるホモ・エコノミクスとは、広義のもので、「自分の経済的・金銭的な利益や利得を第一に考えて行動する人」を意味している。また、「言い方を変えると、行動のいちいちに経済的な無駄を省き、できるだけ儲かるように合理的計算に基づいて意思決定する主体である」(16-17頁)。

経済思想史・経済学史を学んだ者にとっては既知のことが多い本書ではあるが、それゆえに初学者に向けて、映画のシーンを事例に多く出すなど、親しみやすくしようという工夫が随所に織り込まれている。その点は啓蒙書として高く評価できるであろう。

第一部においては、ホモ・エコノミクスの成立過程における富と徳の葛藤について論じている。現在は「私たちはホモ・エコノミクスであることを歓迎するような人間観、道徳観の世界に住んでいる」(20-21頁)が、近代以前では利己心がそれ自体として容認されたことはないという。「その意味で近代とは、ホモ・エコノミクスをあるべき人間像として掲げた、はじめての時代なのだ」(21頁)。古典古代の世界においても、キリスト教やイスラム教の支配的な中世の世界においても、金銭的欲望というのは警戒の対象であった。しかし、現実の商業の発達の中で、次第に商業を容認する言説が様々に展開されてゆく。13世紀には徴利禁止令によってキリスト教徒の金貸しが姿を消し、代わってユダヤ人の金貸しが現われ、15世紀にはイタリアでモンテ・ディ・ピエタなる金貸しが公的に設立され、教会が正当な利子と禁止対象の徴利とを区別し始める。18世紀になるとバーナード・マンデヴィルのように、貪欲や奢侈によって経済が回っていることを指摘することで、悪徳を擁護するかのような思想家も現われ、「自分たちが悪徳によって社会的な恩恵を受けている」(46頁)ことを認めるように、人々に迫りはじめる。それに対して、ジェームズ・ハリントンやジャン＝ジャック・ルソーのように、

奢侈や商業を社会にとって危険だと見なし、財産の平等化や農本主義、武徳などを唱える思想家も出てくる。

そうした富と徳の思想的対立の中から、商業社会の道徳を擁護する初期の思想家の一人としてデイヴィッド・ヒュームが現われ、「巨大な転換」をもたらした。本書によれば、ヒュームの共感論においては、「行為の受け手の立場に自分の身を置いたとき、相手の特定の言動に快を見出すか不快と感じるかが徳の判断基準となる」（63頁）のであるから、「結局徳は利益によって基礎づけられている」ということになる。そして、共感人は人々の間に類似があることによって生じるのであるから、「容易に他者の感情を体験できる似たような人々が、共感に基づいて他者の行為や人間性を判定することで道徳が成り立つ」のだと言え、「これはのちに経済学のモデルとなるホモ・エコノミクスの原型ともいえる人間理解である」と論定する。「人は似たような存在で、他者も同じような欲求を持ち判断を行うと想定して行動することで、同種の欲望を別々の対象にふり向ける人々の間で、市場価格が成立するからだ」（64頁）。

加えて、ヒュームは「明白な形で、武勇の徳を称賛する古代社会よりも、人々の自己利益に訴える近代商業社会の方が、国家にとっても人民にとってもすばらしいという近代礼賛の主張」（69頁）をし、富と徳の思想的対立において、富の側を決定的に優位に導いた。もちろん、ヒュームには多様な側面があるが、基本的にはホモ・エコノミクスに資する人間観を提起したとされる。

むしろ、本書において指摘されるのは、経済学の父たるアダム・スミスの方が、富に対して警戒していたということである。『道徳感情論』において、スミスは、「金持ちの方が貧乏人よりいい感じがするからみんなが寄り集まってくるというごくありふれた現象」に対して疑念を抱いており、「スミスにとっては、真に敬意を受けるべきは知識と徳を持つ者」（86頁）であったとする。一見すると富と徳は両立しがたいと考えていたように思われるが、スミスによれば、中下層の人々においては両立しうる。なぜなら、「中・下層の人々が就く職業においては、堅実さや節度、要するに『ほどほど』できちんとしていることが重要である」からだ。「周囲の評価が仕事や商売にそのまま結びつくのだから、王侯貴族のような傲慢なふるまいは到底できない」（89頁）というわけである。

こうした18世紀ヨーロッパの議論を通じて、富の追求に対する道徳的非難が薄れてゆく。そして、19世紀の「科学技術の時代」に至ると、商業や経済活動を、道徳的に擁護しようとするのではなく、科学的に擁護しようとする思潮が生まれてくる。「科学

は自然にかけられてきた神秘のベールをはがしてその合理的法則性を明らかにすると同時に、人間の生活を豊かにするために利用されるべきものとして広く認知されるようになった。そして社会についてもこの発想で、人間のために利用される自然と同様のものとしてその仕組みを解き明かそうとした。これが一九世紀の科学主義が目指した一つの方向であった」（104頁）。こうした科学化を経済学において進めるために援用された前提が「ホモ・エコノミクス」であった。「個人が自己利益のために行動すると想定するならば、その社会的帰結の予測はシンプルになり、理論化がたやすくなると考えられたからだ」（104頁）。人間は、極度に抽象化され、ミルが経済学の前提に置いた人間のようになり、「欲望を持ち、その欲望の対象が富であることをあらかじめ定められた個人、そして富の獲得のためにとるべき手段を相互比較し、合理的に選択できる個人」であると見なされ、言うまでもなく「その個人は、他の属性を意図的に剝奪された理論上の仮構物」（114-5頁）に過ぎなかった。

経済学史の講義や教科書でお馴染みの限界革命の旗手ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズとレオン・ワルラスは、経済現象を力学と数学の言語で美しく描こうとし、ますます人間の抽象化を推し進めた。経済学における人間は「人間離れした人間像」（135頁）となったわけである。

本書の後半部では、限界革命やシカゴ学派のいわゆる経済学帝国主義、特に公共選択理論に代表される、政治学への経済学的分析手法の浸潤などが説明され、経済学的人間観であるホモ・エコノミクスが、人間社会を分析する際の前提となる一般的な人間観として広範に広まってゆくプロセスを概観している。

*

本書はホモ・エコノミクスの展開を中軸に据えた思想史の啓蒙書という点で、類書も少なく、非常に有意義なものであろう。ホモ・エコノミクスの批判書は数多くあれども、本書の問題意識は、現代資本主義社会においては、人々はホモ・エコノミクスであるように強制されているというところにある。「いまでは、私たちはホモ・エコノミクスであることを随所で強制されている。そうでない生き方では、少なくとも『勝ち組』にはなれないのだから、自己利益の主体としてうまく立ち回るか、貧乏くじを引いて一生我慢するかとの二択の様相を呈している」（289頁）。そうであるとすると、単なる学問的な仮定に過ぎないのだから、ホモ・エコノミクスを批判しても仕方がないということにはなるまい。自己利益の拡大や経済的効率性は至上のものであり、我々はそれを追求しないとイケないのだとしてしまえば、地球環境問題も深刻になるだけであろう。本書

のホモ・エコノミクス批判の強烈な問題意識はそこにあると言ってよい。その点にこそ、ホモ・エコノミクスを学問的な方法論的仮定に過ぎないと考えてしまう経済学者にはない著者独自の問題意識があるのだと言える。しかし、逆に言えば、我々はホモ・エコノミクスという学問的な仮説的人間像を現実の在り方として強制されているのかどうかということは考えてみなければなるまい。本書の評価もそれで大きく左右されるように思われる。

換言すれば、今日の地球環境問題を引き起こしている根源的要因の一つである利己的個人主義の蔓延が、経済学帝国主義がもたらした「ホモ・エコノミクスの席捲」に起因するのかどうかということである。もちろん、様々な意見があろうが、私見では、結局は「ホモ・エコノミクスの席捲」という現象は、現状を反映しているに過ぎない学問的な“鏡”なのであって、そうした現状をもたらしたのは、とどのつまりは「近代」であったように思われる。社会に埋め込まれていた個人を解放し、利己的個人主義を生み出した「近代」というものを、経済学は見事に理論的に表現し、説明し、ある意味で正当化した。ホモ・エコノミクスに対する闘争とは、言わば、近代が映し出している“影”と戦うようなものではないのだろうか。評者にはその思いが拭いきれないのである。

著者の重田園江氏は、ミシェル・フーコーをご専門とされる大変に優れた政治思想史研究者である。政治思想史研究者による単なる経済思想史概説というのでは、経済思想史研究者が書いた方がより詳しいものが書けるはずであろう。評者が政治思想史研究者によるホモ・エコノミクスの思想史概説に期待したのは、「ホモ・エコノミクスの席捲」の背後にある権力的なものを炙り出してもらうことである。おそらくアメリカの興隆や覇権、アメリカニズム、そしてグローバリズムへと分析を広げてゆかざるをえなかったはずである。

拙著『市場と共同性の政治経済思想』（ミネルヴァ書房、2022年）の長い序文で評者が問題にしようとしたのも、一つはそこであった。K・マルクスが透見していたように、資本主義のグローバル化は、経済主体の脱領土化をもたらし、共同体を解体していったが、それというのも、資本主義は、イデオロギー的に、経済主体のヴァナキュラーな側面を否定することによってしか拡張することができなかったからである。そもそも資本主義の本源的蓄積期に現れた「新たに解放された人々」というのは、封建的關係性や生産手段から解放された人々であるというのみならず、これまで暮らしを支えてきた土地を収奪され、ヴァナキュラーなものからも解放されてしまった人々をも意味するものであったろう。それは、ノン・トボスとしてのグローバルなプロレタリアートが形成

される重要な条件の一つでもあった。ドゥルーズとガタリが『アンチ・オイディプス』（1972年）において、マルクスの『資本論』における「自由な労働者」を「脱領土化した労働者」¹⁾とも呼んでいたのにはそれなりの理由があったわけである。さらに、今日のグローバル資本主義の時代においては、世界的なインターネット網による脱領土的な商取引が盛んになってきているのはもちろんのこと、挙句の果てにはメタバースの如き地域性や領土概念すらも超越する電子空間の経済活動が現実味を帯び始め、一貫して経済主体のヴァナキュラー性の否定（少なくとも希薄化）の上に資本主義は拡大してきたと言ってよい。

そして、私見では、それに見事に符合したのが、イデオロギーとしての「アメリカ」であり「アメリカ人」であった。移民国家「アメリカ」は、体制イデオロギーとしては可能な限り特定の伝統文化や地域性から中立的であろうとしてきたし、総体としての「アメリカ人」も（表向き）特定の伝統文化や地域性によって定義されない存在であろうとしてきた。そうでなければ、多様な出自的伝統を抱える移民から成るアメリカ国家そのものが存続しえなかったからである。しかし、それと同時に、アメリカニズムがカッコつきの“普遍性”をも獲得したことは言うまでもないであろうし、アメリカ政府も、それを金科玉条の信念として他国に対して掲げて、自国資本にとって都合の良いように強権的に活用してきたことも言うまでもない。抽象化された主体としての「アメリカ人」の住まう「アメリカ」が、近代経済学にとっての楽園であったことは偶然ではあるまい（ノーベル経済学賞の輩出国のリストを一瞥してみれば分かる）。ブランコ・ミラノヴィッチが言うように、「新古典派経済学の夢の世界」とは、まさしく「独特の性質をもった個人が存在しない」²⁾というところに特色があるからである。

近代のホモ・エコノミクスの登場というのは、そうした資本主義下における人間存在の抽象化・個人主義化（アトム化）といったものとパラレルの関係にあったのであり、ある意味ではその理論的反映の一形態であったと言えるのではあるまいか。古典古代や中世の「歴史的制約」（マルクス）に妨げられなくなってはじめて、共同体から解放されたホモ・エコノミクスというアトミスティックな人間観が学問的に全面開花することができたのである。そのように考えると、ヒュームが——そしておそらくスミスやカール・メンガーやF・A・ハイエクらも同じであったろうが——同一の思考様式、価値観をもつような人々の間（それは最早「共同体」と言ってもよかろう）における経済活動を前提に思考していたということは、本書のように「ホモ・エコノミクスによる市場像の原型」（64-65頁）を表していたというよりも、むしろ利己主義的なホモ・エコノミ

クスが織り成すアトミスティックな近代経済学的世界観に対する批判的視座をも提供してくれていたように思われる。他者と同じように感じ、他者の喜びや悲しみや苦しみを理解し、さらに、それらに共感しうる人間たちの共同体をベースにして、自由な市場社会は存立しているのだと考えられていたわけである。つまり、彼らにとって市場とは、本来、共同性と親和的なものであったし、そうでなくてはならなかったのである。本書がホモ・エコノミクスのもつ利己主義的側面を批判し、そのアトミズム（反共同性）的側面を重視していないことは評者との問題意識の違いであろうか。しかし、言うまでもなく経済的利己主義とはアトミズムと表裏一体の関係にあるものであろう。

いささか我田引水的になったが、『市場と共同性の政治経済思想』において評者は、アメリカン・グローバリズムとの関係で、思想的にホモ・エコノミクスを部分的にはあるが考察してきた。もちろん、このテーマの射程は広く、それ以外の観点からも論じることができるはずである。重田氏のような優れた政治思想史研究者による政治思想的・政治学的観点からのホモ・エコノミクス批判を期待しているのは私だけではないはずである。その方面からの考察を次回作で期待したい。

注

- 1) ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症（下）』（宇野邦一訳、河出文庫、2006年）24頁
- 2) Milanovic, B., *Capitalism, Alone: The Future of the System That Rules the World*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2019, p.192. [西川美樹訳『資本主義だけ残った——世界を制するシステムの未来』みすず書房、2021年、227頁]

(第20期第16研究会による成果)